



# 希望に満ちて

さいたま市立大門小学校

心豊かで たくましい  
大門小児童の育成  
< 夢と目標をもち、  
生き生きと活動する子ども >



## 春の七草

校長 宮本 江津子

大門小の正門を入ると、まだ、雪が残っています。寒い日々が続いておりますが、皆様、新年を迎え、いかがお過ごしでしょうか。本年も変わらぬ、ご支援、ご協力の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

1月2日の夕刻から降り出した雪は、辺りをあっという間に白銀の世界にしました。さいたま市では5センチの積雪となったようです。お正月早々、びっくりしました。今年は、60年に1度の丙午の年となります。十干の「丙」と十二支の「午」は、どちらも火の性質をもつため、太陽のような明るさ、情熱、行動力そして、パワフルなエネルギーを表わしていて、道を切り開く力強いエネルギーをもつ年になると言われています。

『みなさんにとって、よい1年になりますように…』

さて、1月7日、お正月明けに七草粥を食べるという日本の伝統行事食があります。

もともと、七草粥を食べるという文化は、中国から伝わりました。中国では、1月7日に七つの若菜が入った汁物をいただいて邪気を払い、1年の無病息災を願っていました。日本では、奈良時代から、雪の下から出た新芽を摘み、植物の生命力をいただく「若菜摘み」という風習がありました。新年に若菜摘みを行い、生命力に満ちた新芽を食べることで、健康に長生きができると信じられていました。こうして、中国からの風習が伝わり、日本の若菜摘みの風習と合わさって、七草粥が生まれました。

七草粥には、春の七草を入れます。私も、小学生の頃、『せり・なずな ごぎょう・はこべら・ほとけのざ すずな・すずしろ これぞ七草（春の七草）』と短歌のリズムに乗せて暗唱したことを思い出します。七草の入ったお粥を食べることで、お正月に食べ過ぎて疲れた胃を休めるといった意味もあります。また、現代の日本では一年中新鮮な野菜が手に入りますが、かつての日本では、冬に不足しがちなビタミンを補うためにも、七草粥を食べることが重要でした。

みなさんは、七草粥を食べましたか。現代の家庭では、なかなか食べる機会はなくなっているでしょう。（乾燥した「七草粥のもと」を見つけました！）七草粥とはいかなくても、野菜の入った汁物を食べて、健康に元気に、この1年過ごせますように・・・と願いたいですね。

学校は、いよいよ最後の学期「3学期」が始まります。1年のまとめの学期です。今年度のまとめはもちろん、次の学年に進級するための準備をしていきたいと思えます。また、6年生にとっては、小学校生活のまとめの時期、そして最後の瞬間が迫ってきました。悔いを残すことがないよう過ごし、中学校への心の準備をしていけるよう、子ども達を指導し育てていきます。

年度の終わりを迎える年明けに、私たち教職員一同も、子ども達のさらなる成長を願い、精一杯の力を尽くしていこうと改めて決意しています。

今年も、皆様、どうぞ本校の教育活動にお力添えをいただきますよう、よろしくお願いいたします。